

平成 30 年 6 月 22 日現在

機関番号：16401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02640

研究課題名(和文) 日本語ネイティブ遠隔参加型グループ別ピア・ラーニング授業の構築に関する実証研究

研究課題名(英文) Empirical research on construction of peer-learning lesson by Japanese native remote participation group

研究代表者

大塚 薫 (OTSUKA, KAORU)

高知大学・教育研究部人文社会科学系教育学部門・准教授

研究者番号：30372733

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、日本で日本語教授法を学習する学生が日本国内及び海外で行われている日本語教師の多様な授業を見学、参加することにより、日本語教授法を学べる実践的な授業プログラムを考案し樹立することを目的とする。その方法としては、スマートフォンやタブレット端末等のモバイル機器を通じて、日本国内及び韓国や中国の日本語教育現場に遠隔で参加し日本語教授法を実践的に学ぶもので、学生には教授法の、日本語学習者には日本語の習得の効率化を同時に図る授業方式を考案したものである。授業実践により、日本語教授法を学習する学生並びに日本語学習者のインタラクティブな相互交流が行われ、学習の効率化が図られたことが実証された。

研究成果の概要(英文)： The aim of this research is to establish a practical lesson program where Japanese native students can learn Japanese teaching methods by remote observing and participating in various Japanese classes of Japanese teachers conducted in Japan and abroad. For this purpose, Japanese native students participated in the peer-learning groups remotely of Japanese language classes at Korea, China and Japan through mobile devices such as smart phone and tablet PC. In order to Japanese native students learn Japanese teaching methods and Japanese language students get more effective lessons.

Through practical lessons, it was demonstrated that Japanese students and Japanese language students interacted interactively, and the efficiency of learning Japanese and Japanese teaching methods were improved.

研究分野：日本語教育

キーワード：遠隔教育 ピア・ラーニング グループワーク 日本語授業 オンライン教育 協働 アクティブ・ラーニング 共修

## 1. 研究開始当初の背景

IT技術を駆使した遠隔教育方式は、インターネット速度及び移動通信技術の発達の影響を受け、次の段階を経て開発されてきた。

- . 1990年代中盤以降、電子メールや短文メッセージによる一方的な伝達事項のやり取りの形態を通じた遠隔教育への応用
- . 2000年代半ばにおけるSNS(Social Networking Service)の台頭に伴い、個人ホームページやブログ等を通じた掲示板の形態を利用した個人による遠隔教育サイトの発達(文字や写真等を通じた学習形態)
- . 2000年代半ば以降、サイバー大学などの専門的な遠隔教育サイトの発達(インターネット動画を通じた授業の形態)
- . 2000年代後半、インターネット速度の急速な発達により、インターネット画像通話(Skype等)を利用した遠隔参加型チームティーチング授業方式の発達
- . 2010年代、3世代移動通信(3G)及び4世代移動通信(4G LTE)の発達とともにモバイル機器やスマートフォン端末の急激な普及を通じ、場所に関係のないモバイルメッセンジャー(LINE等)及びモバイルSNS、モバイル画像通話方式を利用した遠隔参加型グループ別授業の台頭

以上のようなIT技術の発達を基に、大塚(2004)では対面授業と比較し、より効果的な授業をするために誰もが簡単に無料で利用可能なSNS(Social Networking Service)を授業に応用した研究が実施された。これは、1人の教授者が対面授業時にSNSを授業の補助手段として応用した授業を通して考察を行ったものである。その授業を始めとして、2005-2006年度にかけては科学研究費の補助を受けて若手研究(B)「インターネットコミュニティを利用した遠隔作文教育における教材開発に関する研究」(研究代表者 大塚薫、課題番号 17720127、研究期間 平成 17-18年度)を実施した。これは、インターネットの普及が活発な韓国の大学における日本語学習者を対象に、日本現地のネイティブ教授者によるSNS及び画像音声チャット機能を利用した様々な形態の授業を実施し分析、考察を行ったもので上記の2に当たる。

次に、IT技術を応用した日本語教育における授業方式の効率化のための研究の一環として2007年-2010年度にかけて科学研究費補助金により「無線インターネットを利用したネイティブ教授者参加型チームティーチング授業の研究」(研究代表者 大塚薫、課題番号 19720124、研究期間 平成 19-22年度)が行われた。ここでは、コンピュータ及びウ

ェブカメラがあれば誰でも利用できるインターネット画像通話機能を利用して授業が実施された。具体的には、韓国内の高等学校及び複数の大学において現地の非ネイティブ教授者と日本国内のネイティブ教授者が遠隔参加型協働授業(チームティーチング)を実施して問題点及び効率性に関する考察を行ったもので、上記の4に当たる。このような遠隔協働授業におけるネイティブ教授者の役割としては、話す・聞く・読む・書くの四技能の中では、学習者の話す・聞く及び書く技能に特化した授業において貢献度が高いことが分かった。

その後、2011年-2014年度にかけて科学研究費の補助を受け、基盤研究(C)「遠隔チューター参加による少人数グループ化日本語授業の有効性に関する研究」(研究代表者 大塚薫、課題番号 23520634、研究期間 平成 23-26年度)が行われた。この研究は、海外にいる日本語学習者に対して、インターネットを通じて会話及び作文教育を多様な方法で実施し、その効果を検証し教育現場での直接的な応用を研究したものである。具体的には、大人数クラスで行われる遠隔教育授業内に教授者とともに複数の日本人学生チューターを構え、学生間の相互交流を図るとともに、学習者にとっては日本語能力の、チューターにとっては日本語教授能力の向上を育成することを目標とした授業実践が行われたもので、上記の5に当たる。現在までは日本語学習者に焦点を当て授業の効率化を求めた授業実践を行ってきたが、本研究では、日本語教授法を学ぶ学生に対する授業方案の樹立を目的とする。

## 2. 研究の目的

本研究は、これまでの研究成果を基に日本で日本語教授法を学習する学生が日本国内及び海外で行われている日本語教師の多様な授業を見学、参加することにより、日本語教授法を学べる実践的な授業プログラムを考案し樹立することを目標とする。その方法としては、日本語教授法を学習する学生がスマートフォンやタブレット PC等のモバイル機器を通じて、日本国内及び韓国や中国内の日本語学習者の授業に遠隔で参加し日本語教授法を学ぶものであり、学生にとっては教授法の、日本語を学習する学生にとっては日本語の習得の効率化を同時に図る授業方式の考案を目指す。具体的には以下の2点を目標とする。

- . 日本語教授法を学ぶ学生に対する日本語教授機会の提供、並びに日本語学習者に対する遠隔ネイティブ参加型グループ別ピア・ラーニング授業の機会を提供する。

授業を通じた事例を蓄積し遠隔ネイティブ参加型グループ別ピア・ラーニング授業方式のマニュアル作成及び日本語教授法を学ぶ学生のための日本国内及び海外の大学での実践的な日本語教育現場での指導案の作成を目指す。

・教室授業内にスマートフォン及びモバイル機器の機能を積極的に活用した授業方式の効率化に対する方案を構築し、授業内でのモバイル機器の活用案の作成を目指す。具体的には、LINE等のモバイルメッセージの即時的な質疑応答への適用やグループ別ピア・ラーニング授業時におけるスマートフォンの画像通話機能を利用した学生の遠隔接続による参加への適用に関するもの等である。

### 3. 研究の方法

本研究は、従来行ってきた遠隔教育の研究結果を踏まえて、日本語教授法を学ぶ学生に対して国内外の日本語教育現場に遠隔参加することで実践的な教授方法の確立、並びに学習者のコミュニケーション能力の育成を目指した遠隔授業方法を構築するものである。具体的には、日本語教育現場での授業参観後に、前回の研究で行った遠隔地における大学の日本語授業内に現地の教授者及びパソコンを利用して参加した複数のチューター参加型少人数グループ別授業と今回のスマートフォン等モバイル機器を運用した遠隔授業を比較し、学習者のコミュニケーション能力の向上に関する授業分析を行う。また、複数のチューター参加型遠隔会話授業において、少人数グループを何名で形成するのが妥当かについても同一クラス内でチューターの人数を変えて授業を実施し、学習者の発話・質問回数及び内容や授業アンケートを分析した上で明らかにしていく。さらに、日本語学習者の多い国である韓国・中国における日本語学習者を対象に、レベル別に複数チューター参加型遠隔会話及び作文授業を実施し、レベル並びに国により学習者の日本語能力の向上がいかに関与するかを調査する。

その上で、各授業別に調査したデータを比較・分析し、コミュニケーション能力育成に特化した複数チューター活用授業の実践的な応用を考えていく。また、チューター参加型遠隔教育による効果的な会話及び作文教材のコンテンツを開発し、データベース化する。

### 4. 研究成果

本研究で行われた遠隔協働日本語授業は、以下の通りである。

- (1) 期間: 2015年10月~12月  
授業時間・回数: 日本側: 週1回90分  
全15回(遠隔9回)  
韓国側: 週2回150分  
全32回(遠隔10回)  
学習者: 日本側: 留学生12名・日本人学生4名  
韓国側: 日本語専攻学生10名  
教授者: 日本側: 講義担当講師2名・日本語母語話者教師/日本語非母語話者教師  
韓国側: 講義担当講師1名・日本語母語話者教師  
授業方法: 全体画像接続による自己紹介、講義質疑応答、日韓混成小グループ別討論発表  
使用機器: パソコン(iPad)/モニター各国2台ずつ  
個人所有スマートフォン  
アプリケーション: Skype、Time Viewer、LINE
- (2) 期間: 2016年4月~6月  
授業時間・回数: 日本側: 週1回90分  
全15回(遠隔8回)  
韓国側: 週2回150分  
全32回(遠隔9回)  
学習者: 日本側: 留学生11名・日本人学生4名  
韓国側: 日本語専攻学生13名・日本人学生2名  
教授者: 日本側: 講義担当講師2名・日本語母語話者教師/日本語非母語話者教師  
韓国側: 講義担当講師1名・日本語母語話者教師  
授業方法: 全体画像接続による自己紹介、講義質疑応答、日韓混成小グループ別討論発表  
使用機器: パソコン(iPad)/モニター各国2台ずつ  
個人所有スマートフォン  
アプリケーション: Skype、Time Viewer、LINE
- (3) 期間: 2017年4月~6月  
授業時間・回数: 日本側: 週1回90分  
全15回(遠隔8回)  
中国側: 週1回90分  
全17回(遠隔9回)  
学習者: 日本側: 留学生10名・日本人学生5名  
中国側: 日本語専攻学生15名  
教授者: 日本側: 講義担当講師2名・日本語母語話者教師/日本語非母語話者教師  
中国側: 講義担当講師1名・日本語母語話者教師  
授業方法: 全体画像接続による自己紹介、講義質疑応答、日中混成小グループ別討論発表  
使用機器: パソコン(iPad)/モニター各国2台ずつ  
個人所有スマートフォン

アプリケーション：Skype、Time Viewer、  
WeChat

(4) 期間：2017年10月～12月

授業時間・回数：日本側：週2回180分  
全32回(遠隔6回)  
中国側：週1回90分  
全17回(遠隔7回)

学習者：日本側：留学生18名  
中国側：日本語専攻学生19名

教授者：日本側：日本語話者教師  
中国側：日本語話者教師

授業方法：全体画像接続による自己紹介、ディベ  
ート、日中混成小グループ別討論 発  
表

使用機器：パソコン(iPad) / モニター各国2台ずつ、  
個人所有スマートフォン

アプリケーション：Skype、Time Viewer、  
WeChat

これらの遠隔協働日本語授業は、特別な施設がなくてもインターネットに接続可能な個人のパソコンとウェブカメラとマイク及び個人が所有するスマートフォンさえあれば、誰でも利用可能な画像通話機能を使用して行われた授業であり、双方の顔を見ながら対話できる安定的な一般教室内の設備のみで行われたものである。

1)・2)は遠隔協働日本語授業であり、無線インターネット環境がある程度整っている日本と韓国を繋いで行われた授業である。日韓ともに正規の授業内で実施し、相互自己紹介、遠隔講義とその講義内容に関する質疑応答、日韓混成の小グループに分かれての討論後、発表を行うという形で遠隔協働授業が行われた。

3)・4)は日本と中国を繋いで行われた遠隔協働日本語授業であり、日中ともに正規の授業内で行われた。3)は、相互自己紹介、遠隔講義とその講義内容に関する質疑応答、日中混成小グループ別討論・発表が盛り込まれた授業を構築した。4)は日中でそれぞれの授業が並行して行われる中、共通項目を抽出して相互自己紹介、ディベート、日中混成グループ別討論・発表を遠隔授業で実施した。

その結果、遠隔協働日本語授業においては、以下の4点の特長が見られた。

日本人学生を始め複数の国の日本語学習者同士のリアルタイムの討論を通じ、積極的な相互交流ができた。

複数の国で同時に協定先の日本語教育専門外の教員によるオムニバス形式の講義を受け、日本社会の理解が促進できた。留学前に協定校に関する情報を得ることができ、留学先の教員や学生との繋がりが

が築けた。

日本人学生も外国人学生と協働学習することで、異文化理解並びに日本語教授法の学習が可能となった。

また、遠隔チューターが参加した少人数混成グループ別授業の特長としては、以下の3点が挙げられる。

日本人チューターと日本語学習者の相互交流が図られ、前者にとっては日本語教授能力が、後者にとっては日本語能力が育成された。

大人数クラスにおいてチューターとして複数の日本人学生を活用することにより、日本語学習者の動機づけを高め、聞き手を意識した日本語授業の構築が図れた。遠隔教育における日本語授業で、双方向型のフィードバックの機会を取り入れることにより、日本語学習者のコミュニケーション能力が向上するための授業方法が樹立された。

今回実施された遠隔協働授業は、全体を通して高い満足度を示しており、今後日本語教育分野において身近なIT技術を駆使した遠隔授業の汎用的な運用が期待されるという結果となった。従来の遠隔討論は、Skypeを駆使して1対1の発表に対する質疑応答の形式で行われたが、今回はモバイルメッセージャー(LINE等)を活用したことで小グループに分かれて自由な討論形式で行われた。モバイルメッセージャーによる遠隔討論は、学習者自身のスマートフォンを使用し、その場で日韓及び日中混合のグループを編成しながら迅速に運用でき、距離を感じさせない臨場感のあるディスカッションが展開された。また、遠隔での質疑応答や発表時にもモバイルメッセージャー上に質問事項や発表資料を載せることで、遠隔協働授業に参加している全メンバーが視覚による共有をしながら授業を進行することができ、限られた時間の中でスムーズな授業が展開できたとと言える。さらに、授業時間内で回答できなかった質問に対してもモバイルメッセージャー上で回答したり、各グループの討論内容をまとめたものをモバイルメッセージャー上に載せ情報の共有をしたりし、授業内容の復習やフィードバックにも使用でき、身近なIT技術が授業の補助手段として重宝したことがうかがえた。

このように、日本語学習者並びに日本語教育副専攻の日本人学生がともに学び合える授業の構築を目指して遠隔協働日本語授業という形式で実践的な授業を実施してきたが、双方ともに相手の意見を聞き理解した上

で、自分の考えと比較し発信するという作業を通して多くの学びがあったことが見受けられた。今後も身近な IT 技術を駆使した学習者参加型のピア・ラーニング授業を構築し、教育現場での実践的な汎用化を推進していきたい。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

##### [雑誌論文](計 6 件)

大塚薫(2018)「学習者主体の日中グループ別遠隔日本語ピア・ラーニング授業の構築」北海道大学国際教育研究センターブックレット 2『オンラインでつなぐ協働学習 複数国・地域間での多文化交流型授業の実践』北海道大学国際教育研究センター、pp.56-70、査読無し

大塚薫・古田島和美・林翠芳(2018)「学習者主体の日中混成グループ別遠隔日本語ピア・ラーニング授業の実証研究」『沖縄県日本語教育研究会第 15 回大会予稿集』沖縄県日本語教育研究会、pp.1-3、査読有り

大塚薫・古田島和美・林翠芳(2017)「国際教育を主眼とした日中グループ別遠隔日本語ピア・ラーニング授業の構築」第14回マレーシア日本語教育国際研究発表会 Proceedings、査読有り

[https://www.jfkl.org.my/site/wp-content/uploads/2017/09/Otsuka\\_Kotajima\\_Lin\\_JLEC14\\_2017.pdf](https://www.jfkl.org.my/site/wp-content/uploads/2017/09/Otsuka_Kotajima_Lin_JLEC14_2017.pdf)

大塚薫・斎藤麻子・林翠芳(2017)「遠隔討論を主軸とした日韓グループ別ピア・ラーニング授業の構築」『アジア太平洋における学生流動化と学生支援の潮流と将来像』The Proceedings of UMAP-JAISE Joint International Forum 2017 pp.3C-23-24、査読有り

大塚薫・斎藤麻子・林翠芳(2016)「学習者参加型日韓グループ別遠隔日本語協働授業の構築 画像通話機能を活用したピア・ラーニングの取り組み」日本語教育国際研究大会 BALI ICJLE 2016、日本語教育学会、査読有り

<http://www.bali-icjle2016.com/proceeding/>

大塚薫・王勇萍・林翠芳・斎藤麻子・若月祥子(2016)「産官学の専門家による日韓中協働遠隔日本語授業の試み 協定校間の事例を中心に」『日本語学研究』第 47 輯、韓国日本語学会、pp.73-89、査読有り

##### [学会発表](計 6 件)

大塚薫・古田島和美・林翠芳、学習者主体の日中混成グループ別遠隔日本語ピア・ラーニング授業の実証研究、沖縄県日本語教育研究会第 15 回大会、2018 年 3 月 3 日(土)、琉球大学(沖縄)、査読有り

大塚薫、学習者主体の日中グループ別遠隔日本語ピア・ラーニング授業の構築、2017 年度北海道大学国際教育研究センター研修事業 留学生と日本人学生がともに学ぶ「多文化交流科目」を考える「オンライン協働学習の効果と課題」、2018 年 2 月 17 日(土)、北海道大学国際教育研究センター(北海道)、査読無し

大塚薫・古田島和美・林翠芳、国際教育を主眼とした日中グループ別遠隔日本語ピア・ラーニング授業の構築、第 14 回マレーシア日本語教育国際研究発表会、2017 年 10 月 8 日(日)、マラヤ大学(マレーシア)、査読有り

大塚薫・斎藤麻子・林翠芳、遠隔討論を主軸とした日韓グループ別ピア・ラーニング授業の構築、UMAP-JAISE Joint International Forum 2017「アジア太平洋における学生流動化と学生支援の潮流と将来像」第 22 回留学生教育学会・年次大会第 2 部(研究大会)、2017 年 9 月 2 日(土)、日本電子専門学校(東京)、査読有り

大塚薫・斎藤麻子・林翠芳、国際教育を主眼とした日韓遠隔協働学習授業の構築、SPOD(四国地区大学教職員能力開発ネットワーク)フォーラム 2016、2016 年 8 月 24 日(水)、愛媛大学(愛媛)、査読無し

大塚薫・斎藤麻子・林翠芳、学習者参加型日韓グループ別遠隔日本語協働授業の構築 画像通話機能を活用したピア・ラーニングの取り組み、日本語教育国際研究大会BALI ICJLE2016、2016年9月10日(土)、インドネシア・バリヌサデュアインターナショナルコンベンションセンター(インドネシア)、査読有り

##### [図書](計 2 件)

大塚薫、北海道大学国際教育研究センターブックレット 2『オンラインでつなぐ協働学習 複数国・地域間での多文化交流型授業の実践』北海道大学国際教育研究センター、2018 年、105 頁

大塚薫、日本語ネイティブ参加型グループ別ピア・ラーニング授業の構築に関する実証研究、2018 年、85 頁

##### [産業財産権]

出願状況(計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況（計 0 件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等  
[www.jimu.kochi-u.ac.jp/~soran/index.html](http://www.jimu.kochi-u.ac.jp/~soran/index.html)  
|

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

大塚 薫 (OTSUKA, Kaoru)  
高知大学・教育研究部人文社会科学系・准教授  
研究者番号：30372733

### (2) 研究分担者

林 翠芳 (LIN, Cuifang)  
高知大学・教育研究部人文社会科学系・教授  
研究者番号：00341628

### (3) 連携研究者 なし

### (4) 研究協力者

斎藤 麻子 (SAITO, Asako)  
韓国明知大学校・人文学部日語日文学科・教授

古田島 和美 (KOTAJIMA, Kazumi)  
中国常州大学周有光語言学院日本語学科・外国人講師

金 才鉉 (KIM, JaeHyun)  
高知大学理工学部附属水熱化学実験所・技術補佐員